

# あきあはせ

樋口一葉

青空文庫



あやしうつむりのなやましうて、夢のやうなるきのふ今  
 日、うき世よはしげるわか葉ばのかげに、初はつほとゝぎすなき  
 わたる頃ころを、こそあきあはせの秋あき 拾あはせふるめかしう取とり出いぬる、  
 さりとは心もなしや。垣かきの竹たけの子こきぬゝぎすてゝ、まき  
 葉はにかゝる朝露の新らしきを見るもいと恥かしうこそ。

雨あめの夜よ

庭の芭蕉ばせをのいと高やかに延びて、葉は垣根かきねの上やがて五尺ごしやくも

こえつべし。今歳ことしはいかなれば、かくいつまでも丈たけのひくきなど言ひてしを、夏の末すゑつかた極めて暑あつかりしに唯ただ一日ひとひふつか、三日みつかとも数かずへずして驚おどくばかりになりぬ。秋あきかぜ少しそよくとすれば、端はしのかたより果敢はかなげに破やぶれて、風情ふぜい次第さだまに淋さびしくなるほど、雨あめの夜よの音おとなひこれこそは哀あはれなれ。こまかき雨あめははらくと音おとして草村くさむらがくれ鳴なくこほろぎのふしをも乱みださず、風かぜ一ひとしきり颯さつと降ふりくるは、あの葉はにばかり懸かかるかといたまし。

雨あめは何い時つも哀あはれなる中に秋あきはまして身にしむこと多おほかり。更ふけゆくまゝに燈ともしび火ひのかけなどうら淋しみしく、寝よられぬ夜よなれば臥床ふしどに入いらんも詮せんなしとて、小切こぎれ入れたる置た紙たうがみ紙しとり出だし、何なにとはなしに針はりをも取とられぬ。まだ幼いとけなくて伯母おばなる人に縫物ぬいものなら

ひつる頃、おくみさき 衾つまなり先、褻なりの形など六むづかしう言はれし。いと恥か  
 しくて、これ習ひ得えざらんほどはと、家に近それき某やしろの社につさんに日参にっさんと  
 いふ事をなしける、思へばそれも昔こしなりけり。をしへし人は苔こけ  
 の下したになりて、習まひとりし身おほかたは大方おほかたもの忘れしつ。かくたまさ  
 かに取出とりいづるにも指ゆびの先さきこわきやうにて、はか／＼しうは得えも縫ぬ  
 ひがたきを、かの人ひとあらばいかばかり言いふ甲斐かひなく浅あましと思おもふ  
 らん、など打返うちかへしそのむかしの恋こひしうて、無端そごろに袖そでもぬれそふ心  
 地ちす。

遠とほくより音ねして歩あゆみ来くるやうなる雨あめ、近ちかき板戸いたどに打うちつけの騒さわが  
 しき、いづれも淋しみしからぬかは。老おいたる親おやの瘦やせたる肩かたもむとて、  
 骨ほねの手に当ありたるも、かかよる夜よはいとゞ心細こころこまさのやるかたなし。

つきよ  
月の夜

村雲むらくもすこし有るもよし、無きもよし。みがき立てたるやうの  
月のかげに尺しやくはち八ねの音の聞えたる、上手じやうずならばいとをかしか  
るべし。三味さみも同じこと、琴ことは西片町にしかたまちあたりの垣根かきねごしに聞たきき  
るが、いと良き月に弾く人のかげも見まほしく、物がたりめきて  
床ゆかしかりし。親おやしき友に別れたる頃ころの月、いとなくさめがたうも  
あるかな。千里ちさとのほかまでと思ひやるに、添ゆかひても行れぬ物なれ  
ば唯ただうらやましようて、これを仮かに鏡となしたらば、人のかげも映  
るべしやなど、果敢はかなき事さへ思ひ出でらる。

さゝやかなる庭の池いけみづ水にゆられて見ゆるかげ物いふやうにて、  
 手すりめきたる所に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたる  
 やうなりしも次第に底ふかく、この池の深さいくばくとも量はかられ  
 ぬ心地になりて、月はそのそのこの底のいと深くに住すむらん物のやう  
 に思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに、空なる月と水のかげと孰いづ  
 れを誠まことのかたちとも思はれず。物ぐるほしけれど箱庭に作りたる  
 石一つ水みづの面おもてにそと取落せば、さゞ波なみすこし分れて、これにぞ月  
 のかげ漂ひぬ。かくはかなき事して見せつれば、甥せむいなる子の小さ  
 きが真ま似ねて、姉あねさまのする事わ我れも為すとて、硯すずりの石いつのほどに  
 持もて出でつらん、我れもお月さま砕くのなりとて、はたと捨てつ。  
 それは亡き兄の物なりしを身に伝へていと大事と思ひたりしに、

果敢<sup>はか</sup>なき事にて失なひつる罪得<sup>え</sup>がましき事とおもふ。この池かへ

させてなど言へども、まださながらにてなん。明<sup>あけ</sup>ぬれば月は空に

歸<sup>なごり</sup>りて余波もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん、夜<sup>よ</sup>なく

影<sup>まち</sup>や待<sup>まち</sup>とるらんと哀<sup>あはれ</sup>なり。

嬉<sup>うれ</sup>しきは月の夜<sup>よ</sup>の客<sup>まれびと</sup>人、つねは疎<sup>うとうと</sup>々しくなどある人の心安

げに訪<sup>と</sup>ひ寄<sup>より</sup>たる。男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あら

ば、いかばかり嬉しからん。みづから出<sup>いづ</sup>るに難<sup>かた</sup>からば文<sup>ふみ</sup>にてもお

こせかし。歌よみがましきは憎<sup>にく</sup>き物なれど、かかる夜<sup>よ</sup>の一<sup>ひ</sup>ト言<sup>こと</sup>

には身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大<sup>おほ</sup>路<sup>ぢ</sup>ゆく辻<sup>つじ</sup>占<sup>うら</sup>りのこ

ゑ、汽車の笛の遠くひゞきたるも、何<sup>なに</sup>とはなしに魂あくがるゝ心

地<sup>ち</sup>す。

雁かりがね

朝月あさづくよ夜のかげ空に残りて、見し夢の余波なごりもまだ現うつつなきやうな  
 るに、雨戸あけさして打うちながむれば、さと吹く風竹たけの葉はの露を払  
 ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折をりしも、落おちくるやうに雁がねの  
 聞えたる、孤ひとつなるは猶なほさら、連ねし姿もあはれなり。思ふ人を  
 遠あがたき県などにやりて、明あけくれ便りの待まちわたらるゝ頃、これを聞ききた  
 らばいかなる思ひやすらんと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに、  
 声のみ洩もらして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕まくらに鐘の音ねきこえ

て、月すむ田面たのもに落らんおつかげ思ひやるも哀れ深しや。旅寐たびねの床とこ、

侘人わびびとの住家すみか、いづれに聞ても物おもひ添たねふる種なるべし。

ひととせ下谷したやのほとりに仮初かりそめの家居いへあして、商人あきびとといふ名も恥

かしき、唯ただいさゝかの物とり並べて朝夕あさゆふのたつきとせし頃、軒の

端きばの庇ひさしあれたれども、月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家

の二階のはづれを僅わづかにもれ出いづる影したはしく、大路たちに立て心ぼ

そく打うちあふぐに、秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし。

あはれかかる夜よよ、歌よむ友のたれかれ集つどひて、静かに浮世うきよの外ほか

の物がたりなど言ひ交はしつるはと、俄にはかにそのわたり恋しう涙

ぐまるゝに、友に別れし雁唯ただひと一つ、空に声して何処いづこにかゆく。

さびしとは世のつね、命つれなくさへ思はれぬ。擣衣きぬたの音おとに交まじり

て聞えたるいかならん。三つ口みくちなど嘸はやして小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしう聞ゆるやと浦山うらやましくなん。

虫むしの聲こゑ

垣根かきねの朝顔やうく小さく咲きて、昨日今日葉はがくれに一花ひとはなみゆるも、そのはじめの事おもはれて哀れなるに、松虫すゞ虫いっしか鳴なきよわりて、朝日まちとりて竈馬こほろぎの果敢はかなげに声する、小溝こみぞの端はし、壁の中など有るか無きかの命のほど、老おいたる人、病める身などにて聞きたらば、さこそ比らべられて物がなしからん。ま

だ初霜は置くまじきを、今年は虫の齡よはひいと短かくて、はやくに  
 声のかれ／＼になりしかな。くつわ虫はかしましき声もかたち  
 もいと丈ぢやうぶ夫めかしきを、何いっしか時ときの間まにおとろへ行くらん。人  
 にもさる類たぐひはありけりとをかし。鈴虫はふり出いでてなく声のうつ  
 くしければ、物ねたみされて齡よはひの短かきなめりと点頭うなづかる。松  
 虫も同じことなれど、名なと実じつと伴ともはねばあやしまるゝぞかし。常と  
 盤きはの松を名に呼べれば、千歳ちとせならずとも枯野の末まではあるべき  
 を、萩はぎの花ちりこぼるゝやがて声せずなり行く。さる盛りの短か  
 きものなれば、暫時しばしも似あへよとこの名は負おはせけん、名づけ親ぞ知ら  
 まほしき。

この虫むし一ひととせ籠こに飼ひて、露にも霜にも当てじといたはりしが、

その頃病こころひに臥ふしたりし兄あにの、夜よなく、鳴くこゑ耳みみにつきて物もの
 侘びしく厭いとはしく、あの声こゑなくは、この夜よやすく睡ねむらるべしなど

言ことへるも道理ことわりにて、いそぎ取とりおろして庭草にわぐさの茂さかみに放はなちぬ。そ

の夜よなくやと試こみたれど、さらに声こゑの聞きえねば、俄にはかに露つゆの身みに

寒さむく、鳴くべき勢いきほひのなくなりしかと憐あはれみ合あひし、そのとし暮くれ

れて兄あには空むなしき数かずに入りつ。又またの年としの秋あき、今日けふぞこの頃ころなど思おもひ

出いづる折ひらしも、ある夜よふけて近ちかき垣根かきねのうちうちにさながらの声こゑきこえ

出いぬ。よもあらしとは思おもへど、唯ただそのものゝやうに懐なつかしく、恋こ

しきにも珍めづらしきにも涙なみだのみこぼれて、この虫むしがやうに、よし異こ

物ものなりとも声こゑかたち同おなじかるべき人の、唯ただ今いまこゝこゝに立た出でて来き

たらばいかならん。我われはその袖そでをつと捉とらへて放はなつ事ことをなすま

じく、母は嬉しきに物は言はれで涙のみふりこぼし給ふや、父は  
 いかさまに為し給ふらんなど怪しき事を思ひよる。かくて二夜ば  
 かりは鳴きつ。その後は何処にゆきけん、仮にも声の聞えずなり  
 ぬ。

今も松虫の声きけばやがてその折おもひ出られて物がなしきに、  
 籠に飼ふ事は更にも思ひ寄らず、おのづからの野辺に鳴弱りゆ  
 くなど、唯その人の別れのやうに思はるゝぞかし。

# 青空文庫情報

底本：「全集樋口一葉 第二巻 小説編二〈復刻版〉」小学館

1979（昭和54）年10月1日第1版第1刷発行

1996（平成8）年11月10日復刻版第1刷発行

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「雨の夜」（入力：加藤恭子、校正：浦田伴俊）

「月の夜」（入力：葵、校正：もりみつじゅんじ）

入力：もりみつじゅんじ

校正：浅原庸子

2003年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# あきあはせ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>